

代田 知子^{さん}

[三芳町立図書館館長・司書]



母と、先生と。 「おてがみちょう」の思い出

子どもの頃は内弁慶で、小学校に入学後、教室に知っている子がおらず、友達がつくれませんでした。そのため1か月もすると不登校に。そんな私を心配した母が担任の先生に相談すると、「おてがみちょう」を勧められたそうです。いわゆる交換日記で、原稿用紙を赤いリボンで綴じ、表紙に私の好きなチューリップの絵を描いたノートを母が手作りしてくれました。

最初は「今日、学校に行ったよ」と1行書くのが精いっぱい。それでも母は「よく書いてくれてありがとう」と、話しかけるように、長い返信を書いてくれました。毎朝、それを読むのが楽しみで、いつの間にか私の「学校行きたくない病」は治っていました。

学校でも、先生との交換日記が2年生の時から行われていました。担任の先生は一人ひとりのノートを丁寧に読み、書くのが嫌にならない程度に句読点を直し、感想を書き、うまく書けていると花マルをくれました。

5・6年になると、友達関係が悩んでいることも書いていました。本を読むのが好きで正義感が強かった私は、学級会で「いじめをやめた方がいい」と発言し、友達から無視されるようになったことがありました。この時私は交換日記に「正しいことをしているから気にしない」と書いていました。今振り返ると、こうしたことは親には言いたくないけれど、それでも誰かに伝えた

かったのでしょうか。

読書指導の場面では 子どもの意見を引き出そう

多くの学校では、朝読書が行われていますよね。そこでは、先生も本を、できれば担任している学年向けの本を読んでもらいたいです。子どもの本には大人が読んでもおもしろいものたくさんあります。読んでみると、主人公と同じ年齢だった頃が思い出され、子どもの気持ちがわかるようにもなります。

また、本には子どもにとって人生の目標になる素敵な大人が必ず出てきます。その姿を読むと、「自分はまだまだだな」と思わせられ、考えさせられることがたくさんあります。

本を読んだ後は、「友情の大切さがわかりましたね」など、押し付けがましいことは言わない方がよいですね。そういう言葉は、子どもの、本への興味をそいでしまいます。「読んでみたらおもしろかったから、興味があれば読むといいよ」と、教卓に本を置いておくぐらいの方がいいと思います。大事なのは、子どもの興味を刺激することです。

読み聞かせをして感想を聞くとともに、いろいろな意見を引き出すことが大事だと思います。子どもたちの言葉に「そうだよね」と同調するだけでなく、「他の感想はあるかな」「違う考えの人は？」と問いかければ、異なる意見を持つ子も発言しやすくなります。

中には的外れなことを言う子もいま

すが、否定しないことが大事。繰り返していけば、子どもは自分の意見を言うようになります。

これは普通の授業も同じでしょう。

司書と連携・協力しながら 読書の楽しさを伝えましょう

図書室を活用するには、最低限、探したい本がすぐに見つかるように整理されていることが必要です。まずは図書室がどうなっているかを知り、学校司書がいなければ、地域の図書館の司書に協力を仰いだり、自分で図書の分類のしかたを学んだりしてみてください。そして、子どもたちに利用指導を行うことが図書館活用の第一歩です。

調べ学習や関連本を読む学習の場合、司書に相談して本を集めてもらったり、地域の図書館で借りてもらったりするといいでしょう。司書と連携することで、異なる視点からヒントを得られることもあると思います。

子どもたちに本を好きになってもらうには、上級生による読み聞かせも有効です。本を介して子どもたち同士の交流の場をつくることで、先生が言うよりも、子どもの心に響きます。

私の町には、校長も養護教諭も、先生全員がそれぞれ選んだ本を持ってクラスを回る「読み聞かせ週間」があります。先生方それぞれが選んだ本からは、その人柄が伝わります。

読書の楽しさを伝えるには、やはり先生自身が本に親しむことが一番だと思います。

PROFILE

しろたもこ ● 1956年東京都生まれ。三芳町立図書館館長。父（代田昇）は子どもの本の研究者で作家、母は小学校教諭。こどもの本があふれている環境で育ち、早くから本に親しむ。司書として長く児童サービスを担当。各地で図書館員や保育士向け研修等の講師も務め、2020年度から日本子どもの本研究会会長。著書は「読み聞かせわくわくハンドブック」（一声社）、「えほん、子どものための300冊」（一声社）など。

本に夢中になる先生の姿が
読書の楽しさを伝えるいちばんのお手本です